

祕史の記載に見るも明らかである、従つてその四十三歳の時、即ち既に成吉思汗と稱してから十五年目、また附近諸部落を討平して第二次の即位をした時より二年前に當る西紀一二〇四年の乃蠻征伐の時に至る迄は、文字を使用することも知らねば、印章の用をも知らず、その後に至つても買販の事の如きは全く回々人即ちウイグル人をはじめ西方諸國人の營んだ所で、文化の上から見れば極めて憫れむべき状態に在つたものである、此の乃蠻征伐の結果有名な事件として傳へらるゝ如く、ウイグル人塔々統阿タタトシガを捕虜にして、初めてウイグル字を以て蒙古字を書くことが初まつて來たといふ、暫らく史の傳ふる所をそのままに依據するならば、蒙古部族なるものはこゝに初めてトルコ族からトルコ文化の光を受けたもので、此の後その勢力の發展に伴ふて、或は支那の文化と接し、或は回教文化に觸れ、それら之を輸入するに至つたものである、元朝祕史正續十二卷の書き下されたのは、太宗の十二年即ち一二四〇年であるが、その中正集十卷は、那珂博士によれば既に太祖の時、即ち更に二十餘年の前に成つたものであるといふ<sup>①</sup>、書中書き記されてあることは、主として各地の征戰に關する事柄に過ぎないが、中にはまた制度とか、傳説とか、文化の方面から窺ふべき事柄の記されて居るものもある、當時上に述べた如き未開な蒙古族の間に種々な制度が設けられたとすれば、或はこれは他の制度に支那や印度に限らずに倣つたものではあるまいかといふ考を立て、見なければなるまい、支那とか印度とかの文化に關係が少いとの理由で、直ちに之を純粹の蒙古の文化と見る譯には行かぬ、比較的近い時代に於て勢力を占めて居つた種族を求めて、その間の文化に相似たものが存在しないかを研究して見るのが至當のことであらう。

併しながら前にも述べた如く、蒙古以前に此の地方を支配した民族の文化は、多くは今日に傳はらないのである